



■ INFORMATION ■

新春寄席、来年も開催します!

「明治維新は加治屋町から始まった。新年は加治屋町から笑い始まる」。好評につき、来年も新春寄席を開催します。

【日 時】平成26年1月18日(土)・19日(日)午後6時～
 【場 所】維新ふるさと館 維新体感ホール
 【出 演】桂 竹丸師匠
 　　福田 賢治 維新ふるさと館特別顧問
 【演 目】創作歴史落語「ああ、薩英戦争」
 　　歴史トークショー
 【入 場 料】前売券1,800円(当日券は2,000円)
 　　全席自由席、各日とも限定150名
 お問い合わせは、維新ふるさと館 TEL/099-239-7700まで



●歴史を楽しく語るトークショー(今年の寄席から)

維新ふるさと館オリジナルTシャツ卖っています!!

西郷隆盛と大久保利通のそれぞれの座右の銘、「敬天愛人」と「為政清明」をTシャツにデザイン。シンプルでカッコイイTシャツ!と大人気で、県外から買いに来られる西郷・大久保ファンのお客様もいらっしゃいます。

維新ふるさと館のみの販売ですので、来館記念やお土産にぜひどうぞ…。

★ サイズ:S・M・L・XL ★ 一枚 1,600円 ※黒のみの販売



●外国人にも人気です

維新ふるさと館歴史講座受講生募集

テーマ「女たちの薩摩－幕末から明治にかけての薩摩の女性たち－」

【日 時】平成26年1月25日(土)・26日(日)
 【場 所】維新ふるさと館 多目的ルーム
 【講 師】肥後 秀昭 維新ふるさと館歴史解説員
 【定 員】45名(超えたら抽選)
 【受 講 料】300円(敬老バス・年間パスポート等使用可)
 【申 込 み】希望日、郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記の上、はがきかFAXでお申し込みください
 1月13日(必着)

温故地新

ふる故きを温ね、地元を新たに。

■「賢治先生のふるさと歴史館」放送時間が変わりました

MBCラジオ「賢治先生のふるさと歴史館」の放送時間が変更になりました。11月から毎週日曜日18時～18時30分放送中です。福田維新ふるさと館特別顧問とMBCアナウンサーの美坂さんの息もぴったり。

■お客様“声”ノート継続中。開館以来29冊目

開館以来、入り口受付横に来館者の皆さんとの“声”をお聞きするために、ノートを設置しています。今年で29冊目。19年分の皆さんから寄せられた“声”が詰まった大切なノートです。小学生からお年寄りまで意見、要望等も多種多様。これらの“声”は、館の運営に反映してきました。これからも役立てていってまいります。

■のぼり一新。来年もよろしく

当館の“のぼり”を一新。来年の開館20周年を前に当館のイメージカラー(えんじ色)を使ったかっこいいのぼりです。

平成25年もご支援いただき、ありがとうございました。来年もよろしくお願いします。よいお年をお迎えください。

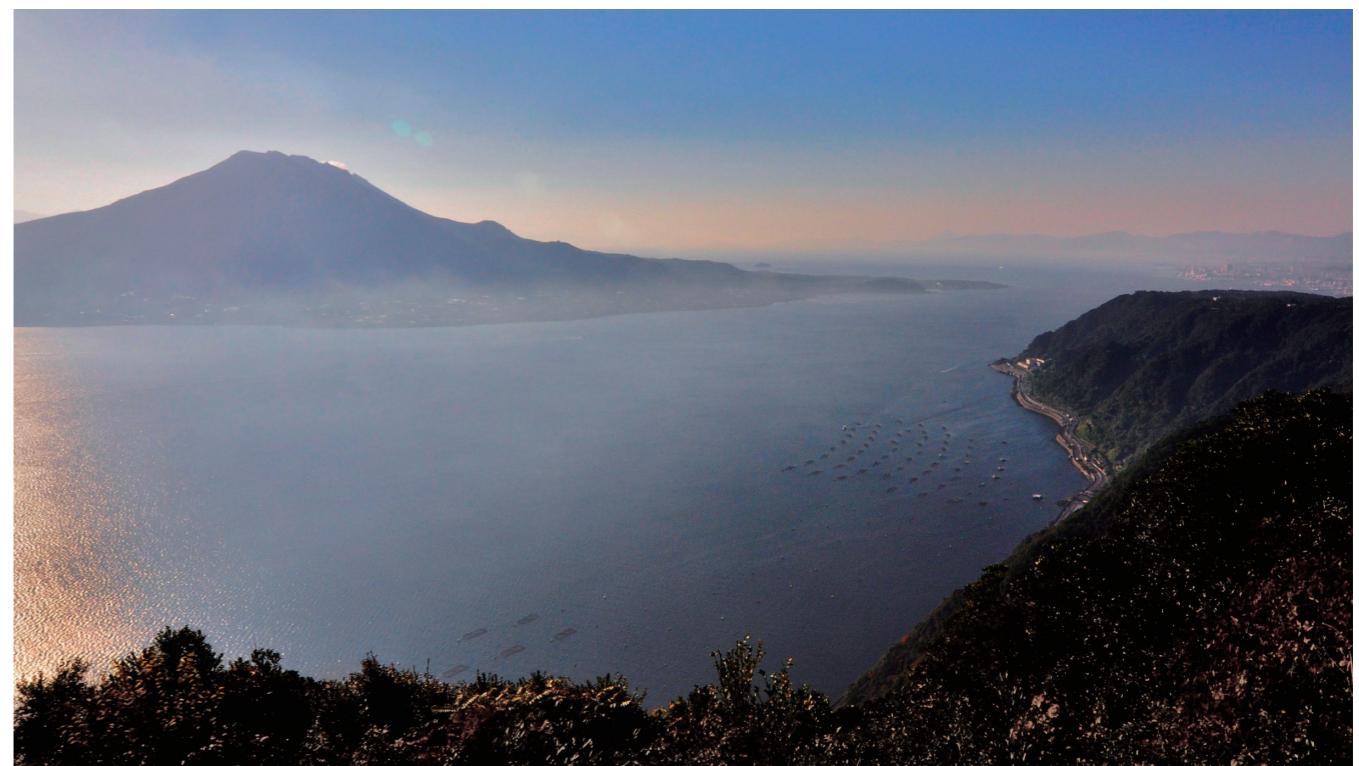


ISHIN 維新

明治維新を分かりやすく、楽しく

維新ふるさと館情報紙
【No.9】

■ 平成25年(2013年)冬季号
 ■ 発行:鹿児島市維新ふるさと館
 〒892-0846 鹿児島市加治屋町23番1号
 TEL.099-239-7700/FAX.099-239-7800
<http://www.ishinfurusatokan.info>



歴史を刻む錦江湾に 募る愛着



寺山の展望台から錦江湾を眺める。この美しい海、空、光の中で150年前、薩英戦争が繰り広げられていたことを思うと、信じがたいほど静かで雄大な眺めである。

当時は錦江湾内の海図がなく、イギリスの軍艦は深さを測りながらゆっくり進んだという。海から眺めた景色は、手入れされたきれいな緑の畑が段々に重なり、そのすばらしさにイギリス人も深く感動したという記録が残されている。

大小7隻のイギリス艦隊がゆっくり進んで時々測量し停止するため、陸地から兵士の姿がよく見えたのである。イギリス兵が時々飲むビールやジュースの瓶や缶など、海に投げ込む姿を見て、薩摩の人たちは「イギリス人が海に毒をまいている」と噂したという。

数日後に戦いの火蓋がきられるが、その様子が薩英戦争絵巻に描かれている。開戦当日は早朝から暴風雨だったというので今の静かな景色とは異なり、暗雲立ち込める風雨の中で交える砲火は、まさに地獄の様相を呈していたと思われる。

戦いはどちらが勝ったとも知れず、残されたさまざまな様子から皆がそれぞれ勝手に想像するよりもはかなかったようである。イギリス艦隊は戦死した将兵達を水葬にしたが、戦い終わった数日後にはその遺体や遺品が薩摩の各地の海岸に流れ着いたことから、薩摩は「勝ったのではないか」と意識したという。

誠に多くの歴史と教訓を残した薩英戦争であるが、一望するこの展望台にたたずむと、雄大な景色と歴史を刻んだ錦江湾に一層の愛着を感じずにはいられない。

(文/福田賢治維新ふるさと館特別顧問)



明治維新を分かりやすく、楽しく 歴史シンポジウム、380人が楽しむ

歴史作家、奄美の郷土史研究家が 西郷の遠島生活を語る

平成25年11月10日(日)、第2回維新ふるさと館歴史シンポジウムをサンエールかごしまで開催。

今回は、「西郷の自己変革と遠島生活」をテーマに、郷土の偉人・西郷隆盛の2度の遠島生活が、彼の思想信条、行動にどのように影響したかを歴史作家の桐野作人氏と2人の奄美の郷土史研究家が語り合いました。

第1部の基調講演では、桐野氏が「西郷隆盛と奄美諸島～書簡から見た奄美観」と題して講演。

西郷にとって奄美、沖永良部への流謫は、「土中の死骨」という考え方を抱かせるものだった。本人には非常に屈折した心情があり、無念やいろいろな思いを秘めて奄美へ来たと思う。

その当時の奄美、沖永良部の状況と都合5年の奄美諸島暮らしを通じて、西郷の奄美観が形成され、西郷の思想信条に影響を与え、西郷を逞しい政治家に育てた、などと指摘。

参加者からは、「桐野先生の話は、史実に基づき、丁寧で分かりやすかった」、「幕末に活躍する西郷の人間形成に影響を及ぼした奄美時代のことがよく分かった」などの感想が寄せられました。



●第1部、基調講演



第2部のシンポジウムには、奄美大島「志塾・西郷塾」事務局長の安田壯平氏と泊西郷南洲顕彰会前事務局長の武吉治氏の2人の郷土史研究家が登壇。

桐野氏を交えて福田賢治当館特別顧問のコーディネートで、テーマの「西郷の自己変革と遠島生活」について、議論しました。

具体的には、(1)西郷が遠島生活を送った当時の藩の離島支配 (2)西郷が交わった主な人物、及びその後の消息等 (3)西郷



●桐野作人氏(歴史作家)



●第2部、シンポジウム

の修養、修学 (4)帰還が許されない状況下での西郷の心境 (5)帰還が許された後の西郷の信条や行動の変化などを郷土史研究家の2人が紹介しました。

参加者からは、「遠島生活が具体的に語られ、理解が進んだ」、「2島の2人が西郷とのご縁を大事にされていることに感動した」などの感想が寄せられました。

「土中の死骨」から2度の流謫へ

(基調講演プロローグ)

西郷隆盛(1827~77)は島津斉彬に見出され、斉彬が進める公武一和の国事周旋に働きながら、斉彬の急死により信愛する主君を失う一方で、安政の大獄により勤王僧月照と錦江湾に入水しながら、自らは蘇生しました。西郷はそれを生き恥として、自らを「土中の死骨」だと自嘲気味に語っています。

その後、奄美大島(龍郷村)への3年間の潜伏という体験は西郷の生涯にとって大きな離伏の時となりました。文久2年(1862)、島津久光の率兵上京に伴い、西郷は復活しますが、久光に「御前には恐れながら地ごろなれば」と直言するなど、最初から円滑な関係ではありませんでした。それが的中し、久光の命令に背いて上京した西郷は久光の怒りを買い、2度目の流謫となります。最初は徳之島でしたが、その後、沖永良部に流されます。遠島期間は2年に及びました。

都合5年ほどの流謫生活は、西郷を逞しい政治家に育てました。いかなる状況でも決してぶれず、肝のすわった一貫した言動が藩内外に注目され、人望を集めました。まさに西郷なくして明治維新はなかったといつても過言ではありません。

維新ふるさと館 書道展

9月23日から10月15日まで開催した西郷隆盛をしのぶ維新ふるさと館書道展。

郷土の偉人・西郷隆盛の人徳と偉業をしのぶとともに、郷土への関心を高めることを目的に西郷隆盛の命日をはさんで開催しており、今年で6回目。今年は県内外から幼少・中学校の部、高校一般の部に1,978点の応募があり、西郷南洲大賞など714点の特別賞を表彰しました。

西郷南洲大賞を受賞された中園未央さんの作品は、墨の使い方や余白の活かし方など作品の効果を高める努力の跡が感じられたと審査員から高い評価を得ました。

年々レベルが上がってきている当館の書道展。次回もたくさんの方作をお待ちしています。



●表彰式には家族づれが目立つた

維新ふるさと館 歴史講座始まる

10月から維新ふるさと館歴史講座が始まりました。今回のテーマは、「西郷隆盛にゆかりのある人々」。

本年4月、当館歴史解説員として就任した肥後秀昭解説員のデビューとなりました。肥後解説員は、小学校の校長、鹿児島市教育員会社会教育指導員を歴任。

「優しく語りかける話は分かりやすかった。次回も前列で聞きたい」と丁寧な解説は好評です。10月の講座は75名、第2回目の11月の講座には127名が受講しました。早くも肥後解説員のファンが増加中です。



●肥後秀昭歴史解説員

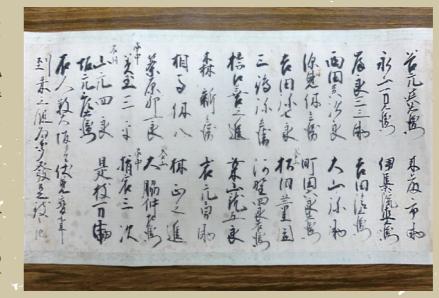
当館歴史講座は来年3月まで実施予定。日程、内容など市の広報紙「市民のひろば」でお知らせします。皆さんの受講をお待ちします。

文久二年(一八六二)七月、倒幕運動の薩摩藩士同士が斬り合うという寺田屋事件が起きた。この直後、関係者の一人であった是枝柳右衛門が、事件の様子を書いたのがこの巻物である。

この年三月、島津久光は公武合体を進めるため、千人の兵を率いて上京した。この際大島に潜居させられていた西郷も許され、一足先に上京。久光の「下関で待て」との命令を無視したため捕縛され、徳之島へ遠島となつた。久光の上京を待つて、各地の尊皇攘夷派は、倒幕の動きを一気に進めようとして、これに呼応した薩摩藩の有馬新七ら過激派も伏見寺田屋に集結。それを知った久光は、彼らと同志である尊皇派の藩士を派遣した。久光の上京を待つて、各地の尊皇攘夷派は、倒幕の動きを一気に進めようとして、これに呼応した薩摩藩の有馬新七ら過激派も伏見寺田屋に集結。それを知った久光は、彼らと同志である尊皇派の藩士を派遣した。



筆記の作者は、是枝柳右衛門は谷松崎の町人出身で、寺田屋事件では脚の病気のため、志士たちとの連絡役を務めていた。内容は藩側のものであるが、見取り図は他にない大変貴重な記録である。柳右衛門は事件後に救急の命が出たが、同地で病没した。



巻物の大きさ：縦18cm × 横384cm

是枝柳右衛門筆記（寺田屋事件）